

市民健康講座レポート vol.2

講座名：『ここまで進んだ
消化器がん治療』
～胃がんと大腸がんを中心に～

講師：関川 浩司 医師
(川崎幸病院副院長 消化器病センター長)

日時：平成23年5月21日 (土)
10時30分～11時30分

場所：ミュージア川崎
シンフォニーホール4階『市民交流室』
参加者：満席 (定員150名)



講座レポート

●多くの皆様に参加いただきました！

当日は、見事な快晴！土曜日にもかかわらず、多くの方に参加いただきました。地域の方々の健康に対する意識の高さには毎回頭が下がります。これからも質の高い講座を心がけていきます。



●熱の入った講義

地域の方々の熱気に後押しされるように、関川医師の講義にも思わず力が入ってきます。

●会場からは積極的な質問が

講座後は、会場の皆様からの質問に、関川医師がお答えしました。非常に多くの質問が寄せられましたが、時間の関係上、皆様からの疑問のすべてにお答えすることができず、申し訳なく思っております。



講座レジュメ

●まずは基礎知識のチェックから！

◆Q&Aで皆さんの常識をチェックしてみましょう

Q、食事の後にすぐ横になると体に悪い？

⇒×：むしろ良いです。右側を下にして横になるとよいです。逆に食後すぐの運動は胃に血流が行くのが少なくなり、消化に良くないです。

Q、お通じがあった後すぐにお通じをしたくなるのは要チェックだ？

⇒○：要注意！大腸がん(中でも直腸がん)の症状の一つです。

Q、がんの原因の大部分は遺伝だ。

⇒×：大部分ではない。遺伝が原因なのは10人中1人以下です。

◆胃がん・大腸がんは他のがんと比べて予後の良いがんです。

日本人の3人に1人はがんで亡くなります。特に胃がん・大腸がんは近年、日本人に多く、一般的ながんになってきております。しかし、**胃がんの生存率は6割、大腸がんの生存率は7割**となっており、肺がんや肝臓がんと比較すると生存率が高いがんなのです。

●胃がんについて ※実際の画像を用い分かりやすく解説しました

胃がんの症状：胃のもたれ感・不快感・痛み、貧血などもありますが、**ほとんどは無症状**です。ですので、定期的な検査が大事です。※胃がんの検査には、バリウムを飲んでの**胃のレントゲン**、**胃カメラ**、**超音波**などあります。

胃がんの治療：がんのタイプや進行度(深さやリンパ節の転移度合い、遠隔転移有無)によって『胃癌取り扱い規約』により病期が決められ、また‘胃がん治療ガイドライン’に基いて治療法を決めます。手術や抗がん剤による化学療法、などの治療をがんの進行度によってうまく組み合わせながら治療していきます。早期のがんであれば、内視鏡で切除することもできます。このため**早期発見が大切**です。がんの進行度によっては、胃の切除などの外科的治療を選択しますが近年では、比較的早期のがんについては腹腔鏡下手術を選択することが多くなりつつあります。

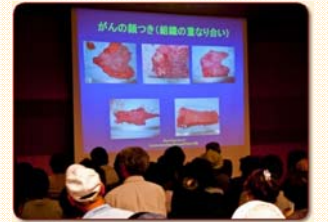
腹腔鏡下手術とは：お腹に5～10mm程度の小さな孔(あな)を開け、腹腔鏡カメラでおなかの中の様子を映像モニターに写しながら特殊な器具を使って手術を行う方法です。開腹手術と違いお腹を大きく切らないため、術後の回復が早い方法です。当院では、種々の疾患に対し昨年は225例の腹腔鏡下手術を実施しました。

●大腸がんについて ※実際の画像を用い分かりやすく解説しました

大腸がんの症状：血便、便が細くなる、残便感などありますが、胃がん同様、**無症状が多い**です。**うんちは健康のバロメーター**です。うんちに血が混じる、あるいは便が細くなった、出てもまた出たい気がするなどが大事な所見ですので日頃から**うんちの性状を見ておく**ことが大切です。検査としては**大腸カメラ**、**大腸透視**、**CT検査**、**超音波検査**などがあります。

大腸がんの治療：胃がん同様、がんのタイプ・進行度によって、‘取扱規約’に大腸がんに基づいて病期を決定し‘大腸癌治療ガイドライン’によって治療法を決めます。胃がんと同じく**早期発見が大事**で、早期がんでは大腸カメラで切除できるものもあります。外科的治療、抗がん剤などをがんの進行度によってうまく組み合わせながら治療していきます。直腸がんの中には局所再発を予防するため最近では手術前に抗がん剤+放射線治療も行うようになりました。

腹腔鏡下手術：胃がん同様、早期がんには腹腔鏡下手術を選択します。また当院では高度な技術を要する進行大腸がんに対しても腹腔鏡手術を積極的に採用しております。



●インフォームド・コンセントの重要性

がんになった時、どの治療法を選ぶかは最終的には患者さん自身の自己選択です。そして選択するためには、自分の病気や治療法を十分に理解することが必要です。私は患者さんに病気の説明するときに、患者さんに「理解」していただくことを何よりも大切にします。一方的な説明にならずに、「患者さんに分かりやすい言葉で説明し、十分に理解していただいてから、治療法に合意いただく」。これがインフォームド・コンセントのあるべき姿だと考えています。

がんは治る病気になりました。患者さん自身にとっての最善の治療法を、われわれ医療者とともに選択していただきたいと思います。